

Title	—社会学徒の独白
Sub Title	
Author	吉原, 直樹(Yoshihara, Naoki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1996
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.1 (1996.) ,p.23- 25
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 社会学はいま、何をなすべきか
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19960000-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一社会学徒の独白

吉原 直樹

1. 私は事情があって本務校の講義のほかに2, 3の大学で教鞭を執っている。そのうちのひとつとは、もうかれこれ10年近くの「つきあい」があり、あるときには本務校のコマ数に近い講義をこなしていたぐらいだから、そのかわりは非常勤といっても半端なものではない。そんな講師業を私はのんびんだらりとやってきたのであるが、ここにきて教壇に立っていてオヤと思うことが多くなった。著名な社会学者たちの名前を出しても学生たちはきょとんとしているのである。ハッとと思って、ウェーバー、デュルケーム、ジンメル…等々名前をあげて知っているかと尋ねてみると、ほんのわずかばかりの学生がそういえば名前ぐらいは聞いたことがあるというだけで、ほとんどの学生は知らないし読んだこともないと答える。私はふだん「社会学者」と呼ばれる人びとと交わっているので、かれらの指導をうけた社会学専攻の学生たちがスミスやマルクスについて知らないとしてもさほど奇異には感じない。けれども、ウェーバーやデュルケームがかれらにとって「無名」であることをすんなりと受け入れるには、やはり抵抗がある。

思いあまって、今春(95年)の開講時に学生たちに小さなレポート用紙を配って、知っている「社会学者」の名前を自由にしろさせた。意外にというか、あるいは案の定というか、上位3位までのところにいまはときめくH, U, Mの名前が集中した。そしてウェーバー、デュルケームはといえば、かろうじて下位に名前をつらねるにすぎなかった。このことを親しい友人にこぼしたところ、かれはやや皮肉っぽい笑みを浮かべて、だから社会学は「社怪学」なんだよと、筒井康隆と同じようなことをいつてのけた。もっとも、哲学を専攻するかれによれば、あちらの業界でも状況はあまり変わらないという。あるとき、かれの研究室におしかけてきた学生がマルクスについて知ったようなことをいうので、どこで勉強したのだと聞いてみると、Kという文芸評論家の名前を何ら臆することなくあげたというのだ。経済史を専攻する別の友人もまた口裏を合わせたように、同じたぐいの繰りごとを吐く。ちなみに、止揚を「トメアゲ」と平然といい放つ学生には、驚きを超えていらだちを覚えたという。

哲学や歴史学がそんなだから、所詮社会学はとっと思ってみるのだが、私の社会学に投じる吐息はこのところ深くなるばかりだ。鳥兔匆匆たる年月にもまして、私たちを沸き立たせた名うての社会学者が急速に「無名」になっていく状況に容易ならぬものがあると考えるのは、涯して私ひとりだけであろうか。この期に及んでと他人(ひと)はいうかもしれないが、作品とそれをものにした社会学者の重量がひらりとかわされる社会学の動向は、奇妙な変転をとげているという他ない。むろん、昨今何かにつけてある種の「社会学者」の

本が取り沙汰されるのは、それはそれで社会学業の興盛をしめすものといえるだろう。けれどもそこには、「社会学者」としての過剰なまでの自意識、そしてやたら「ものわりのいい社会学者」を演じたがるパフォーマンスをみることはできても、ものごとの底にかくれている意味をドラマチックに構成しようとする制作意欲には乏しいようにみえる。社会学的想像力がすっかり現実に追い抜かれてしまっており、そこから時代の憂愁が立ちのぼってくることを期待するのは、まったく困難な状況だ。だからこそ、創始者たちのマインドに立ちかえって想像力の回復をもとめることが要請されるのだが、みられるように社会学者「無名の時代」がこの業界をすっぽり覆っており、事態はそう単純にひらかれそうにない。

2. それにしても、海の向こう側で社会学の危機が取り沙汰されるようになってからずいぶん時が経った。その走りの議論に出くわしたのが、ちょうど私が経済学から社会学に転じた頃であり、当時なぜ危機なのかと真剣に考えたものである。私はもどかしがり、社会学には致命的な欠陥が内在するのではないかと考えないわけではなかったが、いまもって明確な答えを見だし得ないでいる。この間、社会学徒としての私の歩みは身近の友人たちと較べても相当のろまであった。けれどもここに来て、社会学の危機がいっそう増幅された形で立ちあらわれるなかで、その実相がなんとなくわかるようになってきた。いや少なくとも、そんな気がするのである。

巷間伝えられるところによると、イギリスの社会学とりわけ経験的社会学はサッチャリズムが吹き荒れるなかできわだってむずかしい状況においやられ、いまもって旧に復していないという。「宗主国」であるアメリカもまた、デパートメントの縮小や模様替えが目立つなかで、社会学に向けられた、半ば自虐的な意識と化した危機論が下火になる気配はない。むしろ、社会学的プログラムにたいする公的関心の衰微(=財政削減)がいっそうすすみ、社会学業がまぎれもなく商品価値を失いはじめているという現状認識の上に、危機論はますます得体の知れない拡がりをみせているといえる。それは、下地をなしている、社会学が凝集力のある理論的核を喪失しているという認識を、こんにちの歴史的境位を前にして社会学が知の掘り出しに必ずしも成功していないという反省的視座に立って練り上げていくというものではなく、ややもすれば行き先不明の無常感のようなものに導きがちである。

社会学業がたまたまある時期に商品価値を生みだし、時代の移り行きにうまく乗れたからといって、それで社会学の社会的価値がふくらむというものではない。逆に商品価値が急激に下落したからといって社会学の社会的価値がいちじるしく損なわれてしまうというわけでもない。世俗的な浮き沈みとは別に社会学の危機が取り沙汰されるのは、それが視野の閉塞と方法の枯渇という状態に陥っているからである。私は社会学に何ほどかかわってきて、このことをひしひしと感じる。さまざまな論議が立ちあらわれては消えていくな

かで、「都市の危機」をつらぬいている時間と空間の変容にたいして無自覚なままに、都市社会学のレゾン・デートルを詮議することのむなしさを噛みしめているといってもよい。そうはいつでも、ここから危機論を颯々と展開するというのではない。社会学の危機と社会の危機とが相通的であること、そして危機から再構成への道筋をしめすことが取り急ぎ問われていることを確認しさえすればよいのである。

3. 私が拙い社会学徒としての半生を振り返って感じるのは、社会学は、これは凄い、とひたすら感心してしまうようなものではないということである。考えてみれば、私は別に志があつて社会学徒になつたわけではない。経済学に興味をなくしたときに、たまたまそこに社会学があつたにすぎない。とにかく自分の前に広がる未知の現実をあてどなく彷徨ううちに、いつのまにか現実の向こう側にたどり着いていたこと、そしてその地点から想像力をふくらませていくのに何か新しい知の枠組が必要になっていたことが、私を社会学に向かわせたのである。私は社会学徒でありながら、長い間社会学にたいして覚めた態度で接してきた。社会学とはこういうものか、それなら社会学はおもしろいものかもしれないと私が考えるようになったのは、現実の向こう側でさまざまな作品に出会い、語り合える「社会学者」に遭逢してからである。最初から社会学への憧れを抱いていたわけではない。現実を隈なくめぐり歩きその全体像を知悉する途次で、社会学というものの背後にある論理体系に思いをいたすようになったのである。そして、こうした論理体系の樹立のために心を悩ませ、生涯の大半を費やした社会学者たちの生き様にひどく心が踊つたのである。作品が紡がれた場と状況に降りて、作品をものにした社会学者の視線の高さで「歴史」に出合うことに無上の喜びを覚えたものである。

けれども、こうした私の体験は、社会学者「無名」の世代にとってはきわめて主観的であり、滑稽な事態に陥っているということになろう。だから、それをもって冒頭で触れたような現状を嘆くことは、全く無意味であり詮ないことであると思う。ただ私自身、かれらとの共存がある臨界局面に達していることを、このところとみに強く感じる。結局、社会学業の隅のほうで細々と自分の仕事を続けていくしかないが、ある種の「社会学」が跋扈するいまの形勢がいつまでも続くとは思われない。海の向こう側の社会学の危機がいつこちらに飛び火するかわからないというのが、いまの状況である。

(よしはら なおき 東北大学文学部)